『日本語学論集』創刊の辞

鈴木　泰

今年度は、東京大学としても法人化によって新たなスタートに立っていますが、国語研究室も、新スタッフが加わり、これまで最大の規模の五名体制となって、研究・教育の両面にわたって充実してまいりました。が、一方で、就学人口の減少のなかで、国語学を含む言語文化の領域は立ち行きの大変な時代に立ち至っており、その研究に携わる者にも、これまで以上に、きびしさ、たくましさが求められていくであろうと思われます。そうした研究者を育てるために、最も有効な研鑽の場として、執筆の機会が保証されることの必要性はますます高くなってきたといえます。そのような場として、ここに研究誌『日本語学論集』を発刊することとしました。その継続的な刊行のためには、ぬるま湯的な環境ではなく、教員が一丸となって院生や若手の研究者を叱咤激励し、研究のきびしさを体得させていくような場をつくっていくことが是非とも必要です。

こうすることを通じて、本誌を、学問的にもすぐれ、かつ堂々と外部に自分の意見を発表できる研究者を世に送り出すための場とするとともに、教員相互、および教員と院生の密接な意見交換の場とすることも目論んでおりますが、それにとどまらず、本誌が日本語学の新たな胎動をもたらし得る研究誌になるように努力する所存です。それに際して、わが国語研究室としては、従来の枠にとらわれることなく、新たな領域にも積極的に取り組みたいと考えています。もちろん、事実を正確に把握することをおろそかにせず、長いスパンに耐えうる理論的研究にも力をそそぐ姿勢を貫き、そうした研究を学界全体の流れともしていきたいと思っています。

しかし、日本語学自体が以前にくらべて多彩に専門化した分野を多数抱え込んでおり、さらに、隣接の学問分野とも切り離し難く関わってくるようになっている現状では、そのような目標を達成するためには、狭い研究室にとどまっているだけでは不十分で、学外の研究者との広範で密接な交流および積極的な協力関係を構築していくことが必要です。本誌がそうした関係を保障する媒体となり、互いが

その教育・研究水準を高めることに寄与するものとなっていくことを期待しております。

一方で、わが国語研究室には伝統によって培われてきた独自な研究領域があり、それらは研究論文という形をとりにくいものの、研究室や個人の内部だけに留めるには惜しい、高い学術的水準をもつものがあります。そうした成果や情報を広く公表する媒体としての役割も本誌には求められておりますので、本誌は研究ノート的な論攷や資料紹介などの場としても力を発揮することになろうと思われます。つまり、本誌の発刊は、本研究室の教官や院生が取り組んでいる研究活動の内容を広く報告するという研究室からの発信であるという側面も強くもつことになるということです。

本誌の執筆者には院生、若手研究者だけでなく、教員も含まれますが、本誌は、日本語学科のある他大学や日本語関係の研究機関にも国外も含めて広く配布され、多くの研究者の目に触れるところとなるわけです。教員の論文はもちろんのこと、院生の論文も同じように厳しい眼光にさらされることになります。そうした外からの評価に耐えられるよう、水準の高さを保つことが求められていることを我々は重く自戒しておくつもりです。もちろん、本誌の継続は、本研究室の教員にも大きな責任を生じさせることになり、現在の立場に安住を許さず、互いに刺激しあって研究に励み、その成果を学生指導にも活かすことが求められることはいうまでもありません。

もともと学問研究は、自己の内的な要求に発するものであり、そのための條件が外部にできるのを待っていてよいものではないはずですから、志があるならば、ことは果断に行なうべきであると考え、ここに『日本語学論集』の発刊を宣言します。